

アーサー・ホームズ

『人格の形成～キリスト教大学におけるモラル教育』

(邦訳・その4)

A Translation of Arthur F. Holmes, *Shaping Character: Moral Education in the Christian College*, Part IV (pp. 58-82)

伊藤 悟
Satoru Itoh

訳者解説

本稿は、Arthur F. Holmes, *Shaping Character: Moral Education in the Christian College*, Eerdmans Pub. Co., Grand Rapids MI, 1991の第5章ならびに第6章(58-82頁)の邦訳である。本紀要第35～37号に連載の拙訳(その1～その3)に続く「邦訳・その4」であり、本稿が最終回となる。本書はわずか80頁程度の小さな書物であるが、神学、社会学、心理学の共通テーマとしてキリスト教大学におけるモラルの衰退問題を真摯に受け止め、忠実にその分析作業を試みようとする有用な書物である。

アラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』(みすず書房)の指摘は、米国のみならずわが国においても、多くの大学人に少なからぬ衝撃を与えた。今日の学生気質の変化、大学(教師)の質の変化、学問世界(大学)の変化、それらはとりもおさず文化の変質を意味し、また近代文明の行き詰まりを露呈している。大学では、モラル教育にはこれまでほとんど関心が払われてこなかった。発生した個々の事態への対応や再発防止のための方策は講じてきたが、日常的なモラル教育は皆無に等しい。しかし、もはやモラル教育は教養教育の柱、否、高等教育における最重要理念の一つとして考えなければならなくなっている。本書が指摘するように、そのかたちは有形無形、つまりカリキュラム化されたものと潜在カリキュラム化(hidden curriculum)されたものがあるが、いずれにせよ大学人の意識のなかにモラル教育の座が据えられなければならない。

とくにキリスト教大学はそうした使命を一身に負っている学校と言えよう。ブルームをはじめ、高等教育における教養教育の重要性をうたう人々は多く現れているが、キリスト教大学に関わるわれわれにとっては、ホームズが指摘するごとくに、「キリスト教大学におけるモラル教育の使命」を改めて確認する必要がある。そこには明瞭な聖書的基礎づけ、すなわち基盤としての聖書的人間理解が要求されるし、大学としての信仰的・神学的な姿勢が問われる。またそのための意識の向上や教員養成も大きな課題とされる。

恐らく倫理的再建なしに大学の再生はない。わが国ではこの危機意識はまだ極めて低い。個人主義が謳歌される時代において、今後大学はどこまで社会秩序を整える文化創造的使命を担っていくことができるのだろうか。わが国においても、大学とりわけキリスト教大学の社会的存在意義がいま改めて問われ始めている。

キーワード：決断、責任の主体、美德、道徳的アイデンティティ、裏づけテキスト、価値観の領域

第5章 人格の成長

聖書における義の概念は、良心を形成したり分別ある判断力について学ぶ以上の広がりをもっている。義は単に正しい行動をとるかどうかだけではなく心の内的問題であり、それは、私が何に価値をおいてどのような行動をとるか、そして私自身が自己存在の根拠をどこにおくどのような人間なのかという問いかけである。聖書はこのことを多様な仕方でも述べている。イエスは「心の清い人々」（マタイ5：8）を祝福した。純真な人々、平凡な人々もまた然りである。ヤコブは、「心が定まらず、生き方全体に安定を欠く人」（ヤコブ1：8）について忠告しながらこのことを繰り返し延べている。またパウロは、われわれに「かえって自分を無にし僕の身分になり、…死に至るまで従順でした」と述べて道徳的理想像としてのキリストを思い起こさせた上で（フィリピ2：5-5）、彼独自の例えを用いながら、目標を目指して賞を得るために走りつづけることに言及している（3：4-17）。これらはいずれも堅固で揺らぐことのない人格について強調するものである。

「人格 character」の語源をたどると、それは、ある目的のために何かを削り取ったり刻み込んだりすることであり、それがどういったものであるかを誤解されないためのしるしである。したがって、それは道徳的人格と一体であり、日々の生活で何が起きようとも維持されていくものである。決してそれは、状況に応じた行動でも、まるで到達されない高い目標の集合体でもなく、私が堅実な自己であるための心の事態と言える。道徳的な意味で、ひざが弱くて自分の足で立つことができない人々を、われわれは弱者と呼んでいる。また、外なる人は明るいが、内なる人は嫉妬、ねたみ、自己中心性、プライドで充ちていることを、われわれは偽善

と呼んでいる。さらに、好意的なことを考えていてもそれを継続できないことを、われわれは無責任と呼ぶ。それらに対して、「忠実な人」、いつもどんなことにも堅実な人、内なる人と外なる人が一致している人のことを、われわれはモラルの確立している人格者として見る。だが人格は一晩で成長するわけではない。人格は注意深く丁寧に耕されなければならない。これが先に述べたグループⅡのことである。

啓蒙主義以降の倫理は、道徳のある行動のパターンに当てはめて粉碎するという仕方でも、じつに実証と決断に強調点がおかれてきた。同様に、罪はある特殊な考えや行いの現れとして一般化され、微塵化されてきた。罪や義は、典型的な学生たちにとって、道徳性の問題や心の深層状態というよりも、むしろ、やって善いことと悪いことといった特定の行動を指すものとして考えられている。

近年、美徳の倫理が新しく注目され始めてきた。美徳の倫理は、確かに啓蒙主義が強調した実証的検証を越えるかたちで動いているものの、いまだ一人の人間の道徳性の相互関連に目を向けるのではなく、個別に分離された美徳に焦点を当てる傾向をもっている。美徳も悪徳も、ある人間の人格やその人間が何者であるかを指し示す構成要素として共存し、互いに絡み合っている一つのかたまりである。心のあるところにその人自身がある。イエスの言うように、思いや行いは心の内から湧き起こってくるのであり、それらは口からもあふれ出てくる。モラル教育は、ただ単に合理的判断や適正行動についてではなく、キリストのような道徳性へと心を磨いていくという、そうした心の習慣について語っていく必要がある。

最近あるクエーカー派の友人が、すべてについて内面的生を強調するのはある危険を伴うと、指摘してくれた。それは、つまり個人の道徳性の強調は社会的関心から目を遠ざけてしま

う危険性があるということである。個人的美德を高揚させはするが公的正義には目を向けられないでいる多くの経済界の人々や政治家たちがよい例である。彼らは内側は信心深くても、外側は世俗化しきっている。もちろんその反対も起こり得るのであって、内面的に一致することもせず形式的な行動を供することだけを期待するキリスト教共同体があったりする。これもまた偽善である。

もっとも、キリスト教倫理は二つの危険を回避するためにある。すなわち、本当に有徳な人格が確かな行動を取っていくときの私的所有と偽善の問題である。そして純粋なキリスト者の人格は、恵みのもとに謙虚に神に追従していくことによって正義と慈愛を求めようになっていく。

美德の倫理や行動倫理学はいずれも排他的なものではない。ジェームス・レストが強調した個人的関心よりも道徳的価値が先行するという道徳的選択の重要性を思い起こしてみたい。それこそが人格である。しかし正しい行動をとろうとするのに加えて、どうしたら公平で愛あふれる行為となるのか、あるいは与えられた状況下で本当に誠実であるためには何が必要なのかを問うときには、美德が道徳的指針を提供することになる。徳を求める人間はしばしば人々が軽視したり避けて通るような複雑な決断の道徳的次元に対しても敏感になっていく。美德は道徳的理解を豊かなものにし、よりよい道徳的決断へと導いていくのである²¹⁾。

数年前私は、休暇中に読んだ書物のうち、新しい時代への挑戦を試みている三冊について注目した。一つはマサチューセッツ・コロニーのジョン・ウインスロップの伝記、もう一つはブリマウス農場の政治家ブラッドフォードの伝記、そしてもう一冊は申命記である。これらはいずれも律法と神の恵みによって正義と慈愛の社会を可能にしようとする点で同様の関心を

もっている。三冊はどれも「知恵」の必要性、つまり全体像に非常に敏感である人、また物事を人道的な立場から知覚できる人は、先を見据える善き決断に寄与できるという美德を強調している。それと同様、哀れみや励ましは、他の人々が見過している未来への可能性を、その人に与えることができる。道徳的知覚を研ぎ澄ますことによって、美德は道徳的決断を引き上げることを可能にしていく。

両者が大事にされていかねばならない。決断と美德の倫理という両者が強調される必要がある。そしてこれが、キャンパス全体における道徳教育の責任を拡張させることになる。道徳的合理性の形態や決断のプロセスについては教室で教えることができるが、学生の人格はあらゆる類いの経験を通して、とりわけ教室での講義よりも個人的人間関係や所属する共同体によって影響を受けるものである。人格の成長を考えていく上で、われわれはそれらを幅広い視野で捉えていかなければならない。

責任主体

ここまでは、グループⅠならびにグループⅡについてみてきた。グループⅠは、正しい価値観、すなわちわれわれが欲し追求すべき善き帰結と、それによって責任的な行いや行動が導かれるために良心に鋭敏になることについてであった。また、グループⅡは、道徳的視点を身につけ、基礎原理に基づいた決断を導くためのイマジネーションの必要性であった。ひとたび原理原則にもとづいた決断、つまり責任的な思考方法や行動が習慣化してくると、何らかの内面的な変化が生じていくようになる。人は人格を成長させながら、責任主体となっていくのである。

人格と行動の間には密接ななかりがある。「人格」というのは、単なる行為者というよりもむしろ行為の主体としての人間を指し示す言

葉である。行為と行動様式はその人の人格を極めてよく繁榮するが、必ずしもそうでない場合もある。それらは、まるで受け入れがたい行動や感覚を隠そうとするために社会的に認知された仮面を被るようにして、偽善を「着込んで」いることもある。あるいは、内的信念なしに社会化され、われわれの中に順応してしまうこともある。しかし、責任的な人間とは、自分の行動を、熟慮して、慎重かつ自由にとらえていく習慣をもつ者、また自分の言動に意味をもたせる者のことである。内的実存は外的実態と合致する。そこには一貫性と完全性が見られる。

20世紀初頭の道德教育は、社会的に受け入れられる行動かどうかを道德的基準とし、したがってそれを推進する行動主義の路線を辿ってきた。キリスト教大学における行動様式もしばしば人格の形成よりもこうした方向性に流されるものであった。温情主義的であったり保守的であることが場当たりに強調されたり、個人的責任よりも懲罰に比重が置かれるようなときには、とくにそうであった。にもかかわらず習慣的な行動は道德的気質を育て、その気質こそが美德となっていくのである。

このことを考察するために、古典的文献の中からアリストテレスに注目してみたい²²⁾。彼は、子どもの道德的訓練に際して、習慣的なことを反復して教えるのが大切であること、そして幼少期の習慣の形成は親や教師たちの責任であることを指摘している。権威も僕も共に教師なのである。しかし、子どもが成長してくると、この方法は通用しなくなる。われわれが知っているように、思春期の青年たちは他人からものを言われるのを嫌がる傾向をもち、彼らは独立した自己へと成長する中で、権威の限界を繰り返し試すことをしていく。パウロはわれわれすべてが何らかのかたちで青年期に経験する事柄を、そうした罪への欲情は「律法によって働く」のであり、あらゆる種類の欲望となって現れ出

てくと語っている（ローマ7：5-8）。道德的な権威は重要である。ウエストミンスター信仰問答においては、神の道德法の三つの機能についてみごとに述べる。すなわち、われわれの罪を明らかにすること、われわれをキリストへと導くこと、そして、生活の規範を整えることである。しかし、すべてのキリスト者が知っておくべきなのは、たとえ神の法と言えども、道德的権威というのはただ命ずることしかできないということである。たとえ人格をつくり上げるためであっても強要するわけにはいかない。

アリストテレスの指摘は、行動の習慣は、もしそれらが道德性に影響を及ぼすものなら、「選択する」ことを通して成熟していくべきであり、選択したものはそれが習慣化されるまで反復されるべきで、そうしなければ何の変化も起こらない、ということであった。つまり、責任主体とは、心の習慣の基盤が堅固であって、美德の高揚を求める人のことである。これは決して容易なプロセスではない。むしろ自己訓練と感情の自己抑制が必要であって、ある人々は他の人々よりもそうした道德的な成長を故意に妨害避けようとする弱い側面をもっている。

こうした類の道德的成長は何をもたらすのだろうか。基本的に良心を形成する手助けをし、善き決断のためのスキルを身に付けていく教育は必要である。価値観を整えることによって自己理解を高めることは、われわれの成長に不可欠なこととして自覚されなければならない。基礎が据えられた道德的思考の習慣は、同時に自省行為へと結びつくようになる。そうしてわれわれは、自らの目標、すなわち個人的成長のための現実的な目標を定めるようになり、それらの目標を達成するために習慣や人間関係を培っていくのである。

深く熟考せずに高い理想を掲げるのは容易なことである。熟考なき邪悪者は、彼の悪ふざけ

が原因となる事態に対しても、「そんなつもりじゃなかった」とごまかし、ある人々は、きわめて不適切な方法で「うつぶんを晴らす」ことになる。これは無責任なあり方である。自らの責任を認めるというのは、私が意図したことを弁明するだけではなく、私が他者に対して、どのような言動をするか、私は何者なのかを明らかにすることといえよう。それはすなわち、熟慮し慎重に行動することであり、偶然でもなければ、衝動的なものでもなく、また他者からの圧力によるものでもない。自己の責任を受け入れることが、人生のあらゆる領域において習慣的なものにならなければならない—学校の宿題に取り組むことで良心の完成を目指すにせよ、人間関係を築いたり、自分に与えられた役回りを演じるにせよ。

また、責任的であるというのは、一人で生きているというのではなく、他者への責任を負うことでもある。学内組織や学生サービスの企画も人格形成のためのひとつのサポートのあり方である。意識を高めたり鋭敏になることがまず大事だとしても、他者を援助するという目的意識や計画性をもって慎重に行動していく習慣のためには、やはり責任ある行動が必要である。学生というのは、一般にアイデアに欠けており、奉仕の精神も高くはない。彼らに必要なのは、問題や社会的な脈絡をより深く理解することであり、選択、企画、手段、評価のためのガイダンスを提供することである。責任的行動とは、単に何かを行うだけではなく、何を行うにしても、責任的に選択し、責任的に計画を立て、責任的に準備し、それを責任的に展開し、そしてそれがどうしたらよりよくなるかを学んでいくことである。また責務をまっとうすることであり、評価を期待することである。都会の子どもたちの家庭教師をすることや、環境美化のプロジェクトや選挙の受付作業に携わること、貧しい者に住む場所を提供することなど、意義深

い貢献となるころのあらゆる形の社会参加は、責任について教える道筋を整えることになる。

責任というのは、他者に仕えることの意義深さという点で社会的にも重要であるが、人間として人格を成長させるためにも大切である。責任ある行動のために慎重になっていく習慣は、かつてアリストテレスが言ったように、人々の心の気質を高めるものである。すなわち彼の言うところの美德を成長させていくのである。

美 徳

美德、それはガラテヤ書5章で語られている「霊の実」と同じように、人格の一部をなすものであり、丹念に培うべきものである。美德は、一つの道徳的に安定したかたちとして、ある欲求、すなわちわれわれが目指すべき目標に向かうとする性質をもつ。したがって、それは非常に強い感情的な要素をもっている。ジョナサン・エドワードは、そうした欲求を「性向 affection」と名づけて、宗教的性向の本質とその影響力について非常に幅広く論じている。スタンリー・ハワーワースといった近年の学者たちは、今日の「欲求」が快樂や自分の「好み」に左右され、物事を選択することにだけ多くの努力がはらわれていることを指摘している。つまり彼らは一様に情緒的な次元が強調されていることを承認するのである。美德への習慣は、目的を定めて、それに向かって慎重な手段の選択をしていくのであるから、合理的な側面をもっている。しかし、それ自体による合理的な慎重さは、物事を動かす力にはなり得ない。思慮深く行動しようとする欲求は、ある選択や行動を繰り返すことへとつながり、そうしてモラル気質は高められていく。

ここで、価値観と美德の関係を考えてみることにしよう。第三章では、価値観を、われわれが追求すべき善き結末であると定義した。正し

い価値観は、目的を設定するための理想であり、われわれが認知しようとしまいと善い結果を導こうとする。美德は、しっかりと正しい価値観へ気持ちを向けたり、それらに渴望するための心の習慣のことである。したがって、問題は、美德の発達のためにどのようなことがなされるべきか、善き選択をなそうとする習慣をどうしたら身に付けさせられるか、どうしたら正しい欲求が沸き起こるようにできるか、ということである。いったいどのような心の訓練が必要なのだろう。

これは、学内外における大学生生活全体の教育の在り方やカリキュラムの問題を遙かに越える課題である。「越える」とわたしが言うのは、もしわたしが提起するように、価値観と美德が密接に関わっているとすれば、学生たちの価値観を無視するような教師たちは、学生たちの人格に責任を負う者として、重大な間違いを犯していることになる。価値観とは目的であり、美德は、少なくとも多くの場合、善き結果に至るための積極的な性質のことである。価値観が影響を受けるところでは、美德もまた影響を受ける。だから教師は、学生たちに目的と充実感をもって課題に取り組む習慣をつけさせたり、行動を伴った決断の仕方を教授したり、あるいは、そうした美德に関わりのある事柄を率先して模範を示したりしながら、正しい性格形成を応援していくのである。

美德の倫理は、学生たちにある特定の美德について、それがどのように態度や行動、それに伴う感情や心理状況の中に現れ出てくるかを深めさせることを通して生じるのであって、われわれは、そのための援助を怠るべきではない。自己理解というのは、かつて無視された考えや経験が必要となったり、個人的な目標が定まったり、慣習を意図的に発達させることが本質的要素となったりしたあとで、それらに引き続いて起こってくる。自己理解こそが、人が道

徳的発達をなすなかで大きな違いを形成していくのである。

カウンセリングのクラスであっても、それ以外のどんなクラスであっても、目的設定というのは重要であって、もしそれが疎かにされるならば、その授業は十分に課題への取り組みをすることはできない。どういった美德を培う必要があるのか。忍耐か。自己練磨か。どのような態度や行動でそれを示すとよいのか。どんな状況がそうした態度や行動を引き起こすのか。すなわち、その状況の中で私は内面的に外的にどのような行動をとるのか、そして正しい習慣を身につけるために私は何をしたらよいのか、といった予測をたててみる必要がある。

しかし、美德を養っていく責任は、価値観を伝達するのと同じように、個人や教室の枠を越えて、大学共同体全体にまで、またそれ以上にまで及ぶものである。スタンリー・ハワーワスは、共同体の役割やその物語を演じることの重大さについて語っている²⁹⁾。共同体の物語の中で自分の居場所を探し出すことによって、私はそれを自分の物語にし、その共同体を自分の共同体とする。その物語は、日々、私の物語のなかで、また私のする選択、私の目指す目標、私が形成する慣習のなかで、解き明かされていく。すなわち、その物語は、目標と意味、選択と習慣そのものであって、私の物語の中でその意味を明らかにしながら、その目的を自らのものとし、その求めるところを自らの求めるところとしていくのである。

共同体の構成員は、その共同体特有の物語を保持している。旧約のイスラエルの民は、繰り返し神が何をなしたかを想起し、彼らの祭りはその物語を祝うものであった。スコットランドのカヴェナント（17世紀スコットランドで長老主義維持のために誓約を結んだ人々のこと、訳者）も再洗礼派のグループも同様に彼らの物語を保持してきたし、今でもこれらの共同体で

は、ある特別な性格をつくり上げている。例を挙げれば限りなくある。

キリスト教共同体は、福音の物語と神のこの世における贖いの行為の大きな歴史という独自の物語をもっている。それは、まず神の国と神の義を求めるべきだとする物語である。それらをまず第一に求めることを選択すると、それは私があらゆる事柄の選択をする上での一つの習慣となっていく。

しかし、共同体が祝う通過儀礼や儀式のことも考えてみよう。入信するというのは決定的なことである。誠実な悔い改めと回心は、目的や欲するものが変えられて、心や魂が一方から他方へと移り変わることである。成人回心者の洗礼式は、霊的に聖められ、信仰者として信仰共同体に加えられていくことを象徴とするもので、聖餐式はキリストにある新しい生き方を祝うものである。結婚もまたイニシエーションの儀式であり、記念日はそれを祝う。外国人が帰化するときには、その責任と特権において新しい市民となるための契約の儀式が重視される。これらの例から分かるように、入信儀式や祝祭というのは、新しい共同体の構成員としての忠誠を誓うことである。大学も、共通の理念に共に参与して、思慮深い選択の習慣を追及しようとして、年度初頭に毎年同様の儀式を行って新入生を迎え入れるのである。

だが、イニシエーションだけでは十分とは言えない。結婚に向けての強い意志を今日もっていても、それは明日にはいとも簡単に厄介なものになることもあるし、共に生きるという習慣がほとんどないのに、新しい回心者がイニシエーションのときからあまりに多くを期待されるのでは、彼らは途方にくれてしまうだろう。共同体の構成員は、その責任を、心や魂の成長が訓練されるなかで、実践を通しながら学んでいかなければならない。キリスト教の共同体には、歴史的にもまた今日も、キリストの弟子と

してのよき証しをしている人々が数多くいる。もしわれわれが、そうした証し人の重要性を認めるなら、学生たちに必要な美德とそれらの美德が要求する修養的習慣の両者を具体化する生き証人が学内にいることが求められるであろう。

共同体においては、友情もまた重要である。われわれが教会で「交わり」と呼んでいるものは、共に過ごすことによって気を休めることができ、われわれの生活を豊かにさせるものである。旧約聖書の箴言も、友情は道徳的発達と関わりがあると述べている。またアリストテレスも、友情はきわめて重要なものだと注目して、あらゆる類いの友情について詳細に語っている。われわれは今日、友情をそれほど大きなこととしては考えていない。よき友人関係は、自己中心性を打ち砕き、仕えること、共感すること、他者のニーズに気を配る習慣を身につけさせてくれる。また、他者の知恵や経験、あるいは道徳的発達が共通に目指すもの、必要とされる習慣を培う上での情緒的支援、自らを刺激し自己を変革しようとする意識などにも影響を及ぼす。このような友情にとって欠くことのできない事柄が、齟齬をきたさない価値観、すなわち互いに習慣的なものを形成していく上で必要な善き目標を保持することになる。友人の価値観は、自分の価値観と共に重要なものである。

私が述べてきた、共同体がどのように美德を発達させていくかのほとんどは、聖書に基づいている。聖書は、われわれが、信仰生活、信仰者像、交わり、そして積み重ねてきた知恵を通して、神が何を成し遂げられ、何を成しておられるのかに、共に思いを馳せようとする物語である。聖書がそれらを指し示すことによって道徳的に影響を及ぼそうとするなら、その影響はより命令的なものとなる。そうした命令とその神学、そしてキリストの人格と生涯について

のすべての信仰的描写が、直接的なインパクトを与えていくのである。使徒が言うように、聖書はそれ自体が、われわれの思考や「意志」のなかに美德の座を作り出して、鋭い洞察力でわれわれの感情を教導する。聖書こそが、神の求める、聖霊の有徳なる実を養育するのである。

にもかかわらず、われわれは人間の墮落の厳しい現実には目を閉じようとする。アリストテレスは、意志の弱さが賢い判断を封じ込め、善き習慣を害し、人格に悪しき影響を及ぼすことを知っていた。キリスト者も、それがより致命的な墮落であることを知っている。それでも、人は、キリスト教信仰やキリスト教との出会いを経験しない者も含めて、神の御手のなかで美德を発達させていく。道徳心理学も至るところで人々の重要なものさしとして機能し続けている。アキナスは、正義、慎重さ、勇気、節制といったこの世で他者と共に生きていくための基本的な美德を可能にするのは自然の成りゆきだと述べた。だが、神と共に生きていくとき、信仰や熱望や愛といった美德は神の恵みに依存している。われわれは、違いを明確に区分できるかどうかは別にして、人々の中で広く美德の形成を可能にする共通した神の恵みと、信仰者の上にだけ働く特別な神の恵みの両者が働いていることを認めざるを得ない。すべて善なるものは上からもたらされるのである。

美德はどんなときにも必要なのではない、自己訓練はいつも成功するわけではない、あるいは悪しき習慣を打ち破るのは極めて困難だと考えるのは、人間の罪深い現実には他ならない。だからこそキリスト教のコンテキストにおいては、道徳的発達は霊的発達と手を携えていかなければならない。霊的発達は、すなわち神学者たちの言うところの聖化であり、聖霊が人を罪の縄目から解放し、神の満たしたもう義への渇きを抱かせるという恵みの手段である。しかし、もし信仰的発達と道徳的発達が理論的に連

携するならば、われわれは両者を追求する訓練をしていかなければならない。道徳的な生き方を拒絶したり、信仰者の社会的責任を無視したり、教会の活動に責任的に関わることから遠ざかったり、あるいは個人主義が大きく歪められたりするところでは、霊的生活は倫理的にも霊的にも限られた効果しかもたらさないことを強調しておきたい。自らの内的な感覚や経験にだけ集中したり、「世俗」から宗教的なものを隔絶するといった個人主義化された霊性は、無駄なものと言えよう。より包括的な霊性がきわめて重要である。キリストの主権を生活のあらゆる場面で習慣的に実践していくこと、それによって、個人的にも社会的にも、義への飢えや渇きが飽くことを知らないものとなっていくのである。

道徳的アイデンティティ

アラン・ブルームは著書『アメリカン・マインドの終焉』(*The Closing of the American Mind*)のなかで、学生たちがアイデンティティ、すなわち道徳的あり方の見通しを保障する確固とした統合的核心を見失っていることを指摘している。この問題は、学生たちの相対主義化の問題であり、ブルームは、人類の共通の遺産としてのリベラル・アーツの伝統に立ち返るべきだと主張している。それこそが今日、アイデンティティを取り戻すための助けになると言うのである。

リベラル・アーツだけが人々のアイデンティティを呼び覚まして神の似姿を形づくり、神との関係の中で生きるようにさせるのだろうかと問われたとしても、われわれは、リベラル・アーツの伝統の重要性に何ら異論をはさむつもりはない。個人のアイデンティティの問題は、究極的には、心理学的、道徳的、そして霊的なものであり、決して単なる「文化的」教養や「文化的」アイデンティティではない。

アーサー・チッカリングの『教育とアイデンティティ』(Education and Identity)は、教育者たちの間では、こうした問題は二十年前からあったことを指摘している。彼によれば、予見的な言動はその人の目的意識と一致し、内的な平等性や連続性は他者への平等性や連続性と整合するという信頼関係によってアイデンティティが確立していくという。そうしたアイデンティティが成立しているところでは、自由への感覚が人間相互の関係をかたちづくり、関心と目的を深めていく。アイデンティティとは、価値観の同一化、完成、統合のことであり、それらの価値観が有効に用いられることによって一貫したパターンと言動の一致を導いて、内面的な強さをもたらしていくのである。したがって、個人的アイデンティティは、道徳的アイデンティティという大きなものさしのなかで測られるのであり、道徳的アイデンティティが欠如したところでは、道徳性のみならず個人的成長も抑制されることになる。

われわれが関心を向けているのは、とりわけ「道徳的」アイデンティティである。しかし同時に、道徳的アイデンティティが欠如したところでは、価値観はまるで秩序を失い、そして結局、美徳も危機に瀕することを忘れてはならない。無秩序的な価値観の羅列は、すべての方向性を一気に引きずり込む。また孤立化した美徳は、ともすると、不完全のまま残存したり、ときに歪められることがある。サディスティックなギャングたちは、自分の子どもたちを愛していると言うかもしれないが、必ずしも一人の人間として愛しているかどうかは分からない。道徳的性格というのは調和の取れた気質を並べ挙げるのではなく、すべてにおいて堅固に道徳的アイデンティティを追求することである。したがって、人格の成長とは人が人生におけるあらゆる関係のなかで責任的な行動をとることができる、冷静な、見通しの持てる人間を形成す

ることだとしたプラトンの提起以来、美徳の一致は倫理学者たちの関心の的となっているのである。

個人のアイデンティティに関する二つの異なる哲学的伝統は、道徳的アイデンティティの成長を理解する上での助けになるだろう。一つは、ジョン・ロックから今日にいたるまでの経験主義者たちが、パーソナリティの形成を経験に根拠をおこうとして、つまるところ人格形成はその人の記憶の連続性のなかに依存するものとして捉えるという考え方である。そうした説明は、私があたかも自分の心の孤独さの中に自己のアイデンティティを発見するかのようで、まったく個人主義的なものである。しかしもう一方、ヘーゲルからマルティン・ブーバー、ジョン・マックマレイ、その他の現象学の思想家たちは、個人的アイデンティティは他者との関係の中で浮かび上がってくるものとして、その社会的本質を強調する。私自身もまた、夫、父親、地域住民、教師、友人といった様々な自己を見出すことができる。

確かにキリスト教的理解では、個人というものを関係性の中に見出そうとする。もしわれわれが神との関わり、そして他の人々やわれわれの属する物質的世界との関わりの中で生きるものとして創造されたのなら、個人というものを関係性の中に見出そうとするのはキリスト教的理解にとって当然のこととなる。このことは、記憶というものが関係を経験する中で作り出される以上、記憶理論においても同様のことが言えるだろう。ハワーフスが強調するところの「物語」は、記憶の中に訴えかけるものであり、彼の強調する共同体とその物語は、共同体の記憶の中に訴えかけていく。その結果が神学的、哲学的、心理学的にしっかりと基礎づけられた個人のアイデンティティとしてあらわれ出てくるのである。そして、人間関係は継続され記憶はさらに長く留まるものである以上、個人のア

アイデンティティはそれらと共に成長を続け、同時に道徳的アイデンティティもその人格の主要な要素となっていくのである。

このように、道徳的アイデンティティやその重要性を振り返ってみることは、生い立ちや歴史的・文学的素地を通して、またそれらの美徳や悪徳によって、あるいは、表出したり欠陥があるにせよ、ある意味で一貫したアイデンティティや、彼らの性格を支配している愛を通して、自然に引き起こされていくものである。文学を学ぶことの一つの大きな意義は、文学は人間そのものを引き出し、それを写しだすものであり、それによってより完全でより真実な自己認識にいたるべき者になっていくという点にある。まったく同じように、聖書文学の一つの意義は、美徳や悪徳にまみれている聖書の登場人物たちの現実描写にある。使徒の言うように、彼らの行動はまるで鏡のようであり、われわれは、そこにわれわれ自身を見、神の恵みによってかつてとは異なる姿に変えられようとする決意へと導かれていく。歴史的・文学的素地が道徳的アイデンティティに直接関わるのなら、われわれは、キリストの人格とその地上での生涯を熟考するという仕方でもキリスト教的敬虔の素晴らしさに目を留めることになるだろう。まったく神にしてまったく人であるイエスは他に類を見ない規範であったし、イエスの道徳的アイデンティティは、家族や父なる神との関係における宗教的共同体に基礎づけられるものであった。彼のような人格がわれわれのゴールである。

しかし、どのような関係が、美徳を道徳的アイデンティティのかたちの中に結びつけることになるのだろうか。そもそも美徳が善を目指そうとする性質をもっている以上、美徳は人を最高値へと導き、その結末は安らぎをもたらすものとなる。そして、最高の結末、すなわちすべてのものに価値を与える最高善が神である以上、

神が統合したもう美徳としての愛はそれに続いて生起することになる。アウグスチヌスもアキナスも共に、われわれはわれわれの愛するものによって支配されるという統合的な美徳として愛を取り上げている。アウグスチヌスは、節制とは神に対して自らを腐敗させないための愛のことであり、正義とは神に仕えるための愛、すなわちすべてを秩序だてる仕方での愛であることを論じている²⁴⁾。同じことは他の美徳についても言えよう。神への愛は、すべてを神の御旨に従って方向づけようとする。その意味で、愛は教養を高めるうえでもっとも高貴な中心的な美徳であり、キリスト者の道徳的アイデンティティは、神との関係の中で研ぎ澄まされていくのである。アウグスチヌスの『告白』は、彼の回心のかたちとして、彼が自らをつくり替え、自己を統合させるために丁寧に行った自叙伝的作業である。

そうしてわれわれは、もっとも高貴な善は神に献げられる生と魂であるという慣れ親しんだテーマに立ち返っていくことになる。学問と信仰の統合を試みる倫理を教える場合には、信仰的・霊的成長が必要となってくる。モラル教育とは、倫理的モデルを、神への愛のモデルと結合させることである。コーネル大学でかつて学長を務めたイエズス会のフランク・ロッデスは、次のように述べたことがある。教師が自分の教師としての役割を具体的な形で何よりも優先するなら、それは学生たちの道徳生活、学問成果、信仰生活に大きな影響を与えるに違いない、と²⁵⁾。

神への愛を養育するにあたっては、心からの礼拝を献げる習慣がその中心になければならない。共同体が賛美、説話、信仰告白、聖書朗読、説教を通して語ることがらは、すべて神の義と道徳的人格について物語る方法である。それらは、人間の道徳的責任の基礎として神が何をしてくださったのかという究極的アピールをする

共同体の道德議論のための言語である。礼拝によって、われわれは神の民としての自己を確認する。継続してわれわれの良心をかたちづくり、行動を整え、性格をはっきりさせるという点において、礼拝は一つのアイデンティティを確立させているのである²⁹⁾。

一般的には、靈的成長や個人的成長といった人格の陶冶は、じつに生涯にわたる出来事である。しかし学生時代というのは、人生の中でもとりわけ最高の形成期であり、そこで浮かび上がってくる道德的アイデンティティはその後どのように成長するかといった方向性を決定づける手がかりとなる。もちろんその後も変化は起こり得る。それはよい方向にだけでなく、ときには悪い方向へ変化する場合もある。しかし、大学は、目標を示したり方向性を定めることはできるはずであるし、築かれた友情関係を進行させたり、母校への忠誠を持続させることによって、またあらゆる分野で卒業生に影響を及ぼし続ける手本となる人々によって、未来への掛け橋を築いていくことはできる。卒業式などの共同体の節目になるような式典は、美德を高めてより責任が増し、心と魂と力を尽くして神を愛するようになっていくための人生における新しい段階の始まりとして意識されるべきである。このようにして、キリスト者としての誠実な道德的アイデンティティは、生涯にわたって堅固なものとなっていくのである。

第六章 聖書と倫理——まとめとして

最後に、これまで論じてきたことがらを振り返りながら、われわれの考える道德的成長にとって、聖書が重要な役割を果たすことを明らかにしておきたい。それはたんに、聖書が広く公開されているからというのではなく、われわ

れの目指していることが、より多角的なことであり、多くの諸問題が複雑に絡んでおり、また聖書的貢献そのものも信徒がしばしば考えているよりも遥かに多彩だからである。道德教育は、ただ単に聖書の語るところを力説していればよいのではなく、また裏づけとなる聖書箇所を引用して証拠づくりをすればよいでもない。道德教育は、複雑に絡み合ったり紛糾している状態をも含んでのことであり、われわれは、その只中で聖書テキストと共に、心理学や哲学や神学の助けを得ていくのである。

1. しばしば見られるような、主張を明確にしようとするあまりに、ある聖書箇所を文脈ぬきで抜き出したりばらばらに分解して引用したりするような裏づけテキスト化は、好ましいあり方とは言えない。姦淫は正しいことか間違ったことかというような単純で明解な問いに対しては、すぐさま十戒から引用すればことは足りるかもしれない。しかし、質問者が、神が「今なお、この時代にも」姦淫を容認しているのはなぜか、あるいは、他に姦淫を禁じている箇所はどこにあるかを知りたいなら、十戒だけでは不十分だということになる。さらに、もし誰かが、例えば旧約聖書のヤコブのように一夫多妻に生きる信仰者は、姦通の罪に問われるべきかどうかという姦通に関する定め細部まで尋ねてきた場合には、裏づけテキストというだけでは、それほど役に立ちはない。

われわれには、無関係な裏づけテキストを引き合いに出すよりも、もっと具体的で統一された青写真、つまり、ある主題をめぐる聖書全体が作り出している一つの物語が必要である。こうした回帰は、性と結婚に関して、聖書の見解全体を幅広い視野で、また、聖書的人間観とのつながりの中で保持されていかなければならない。テキストを広い文脈で注意深く考察していくと、われわれは、特別な箇所の具体的な場面やその箇所の歴史的背景だけに目を向け

るのではなく、そのトピックに関して、次第に明らかにされる聖書的啓示やそれを基礎づける神学全般はいったい何を言っているのかに目を向けざるを得なくなる。時代の中で積み重ねられてきた知恵という大きな文脈や、人間の営みや人間の歴史が示してきた事柄は、しばしば聖書が目論見を顕著に示してくれている。したがってここでは、キリスト教倫理の歴史も重視されてくる。

「文脈」という場合、実際には次のことがらが含まれる。(1)直観的に伝えられる文学的文脈、(2)直観的に伝えられる歴史的文脈、(3)旧新約聖書が語っている全体像、(4)神の本質や創造の目的といった神についての神学的全体像と人間の本質、(5)問題となる倫理的問いに対する教会が累積してきた知恵、そして(6)一般的啓示についても加えておくことにしたい。だが全体としての真理問題を見通しながらも、個別のテキストについては注意深く検証されるべきである。

実例として、死刑制度の問題を取り上げてみたい。姦淫や他人の両親を罵ることも含めた様々な犯罪について死刑を認めさせるために旧約聖書テキストが引用されることがある。今日のわれわれは、これをわれわれの現代的実践の結末と促しているのだろうか。イエスは、姦通の現場で捕らえられた女性が処刑されることを救い出した(ヨハネ8)。多くの古代社会であたりまえとされた、ほとんど気まぐれで行われる処刑に比べると、モーセの律法がはるかに慈悲深かったことは明白であるが、イエスは、この女性の処刑人になるはずだった人々と引き換えに、さらに深い慈悲、そして正義を宣言した。つまり、この偉大な出来事は、モーセの律法は墮落した世界の中でいつも突き進んでしまう刑罰のあり方を見直す最初のステップだったことを示している。他から分離した裏づけテキストだけでは十分ではない。

2. しばしば人々が陥るもう一つの危険は、聖書は起こりうるあらゆる倫理的課題に対して何らかの具体的言及を必ずしているはずだとの思い込みである。これは明らかに問題外である。聖書は確かに、いつの時代にもどんな文化であろうと、どんな人々であろうと通用する、幅広い「価値の領域」(仕事、結婚、あるいは人生の価値のような)について語っている。だからこそ、重要な背景となる信念が整えられていくのである。しかし、近代の科学技術や現代社会は、例えば遺伝子の研究、生物戦、原子力廃棄物のような聖書記者たちが想像だにできなかった道徳的課題を突きつけてきている。信仰者にとって聖書は最終的な権威であり指針であることに疑いはない。しかし、それが徹底されているとは言い切れない。聖書の示す大きな原理はつねに適切なものであるが、これまでの章で指摘してきたように他の人々による他の視点もまた手がかりとなる。

聖書は、聖書だけを道徳的理解を深めるための唯一の方法にしようとは思っていない。倫理的出来事における一般啓示もまたあり得る。ローマ書の冒頭でパウロは、すべての者は責任を負っているという当たり前のことを考えても、道徳法は十分すぎるくらい身近なところにあると明言しているし、また今は神の権威として伝承されている箴言もしばしば伝統的な知恵として尊ばれている。したがって、もしわれわれが、聖書を最終的な道徳の権威として尊ぶならば、われわれは他の倫理的方法についても、それらがどれほど価値あるかを同じように検証することになるだろう。われわれは、他の倫理の諸原理がキリスト者の道徳に関する議論に貢献することもあり得ると考えているし、倫理に関する自然法にはとくに耳を傾けようとする。

仮に、聖書を裏づけテキストとして利用するのは好ましくなかったり、聖書はあらゆる倫理的テーマを余すところなく網羅しているのでは

ないとしても、聖書は人間の価値観のあらゆる一般的な領域に関わるものであり、あらゆる領域の中で混成されている道徳原理の全体像を明らかにし古代から教訓的な事例や方法であったのは事実である。倫理教育で取り扱い得るのいくつかのテーマを考え出してみると…。

世界の歴史と自分史
神の性質に関する見解
神の救済の業とその目的
様々な日常性における神学的視点
イエス・キリストの生涯
数々の物語と記録された出来事
人間社会と人間行動への道徳的警告
格言化された道徳的知恵
神の民の生とその特徴
人生の戒めとルール

挙げようと思えば枚挙にいとまがない。ルイス・スメデスによるルールの四類型は、すべての道徳的ルールについてではないが、参考になるものである²⁷⁾。

- ① 義や愛といった完全なる例外なき道徳ルール。第4章ではこれを「総括的原理」と称した。
- ② 特定の責任領域に関するもので、例外のほとんどないルール。
- ③ パウロが偶像に奉げられた食物を食べることについて述べたように、状況に応じて変化する戦略的ルール。
- ④ 女性がかぶり物をするかどうかといった、道徳的というよりもむしろある文化の中で重要とされ、文化によって変容するルール。

3. ひとつひとつの聖書的洞察を考察していくと、われわれが道徳教育について議論するな

かで見てきたように、聖書の影響はあらゆる科目に及んでいることを真摯に受け止めざるを得ない。聖書は目標を定める手助けをし、また次の三つの段階すべてに向け語るものである。すなわち、良心を形成すること、賢い決断をすること、道徳的人格を身につけることである。

「良心を形成する」とは、つまり聖書の登場人物の生やその歴史的出来事の写実物語は、それを読む人々に幅広い問題意識を身につけさせ、複雑な価値構造に敏感になることを得させるということである。旧約の預言者たちが彼らの時代の不義を暴いたとき、彼らは、要するに、価値観の検証と価値観の批評に心血を注いだ。山上の説教（富に仕える者や砂の上に家を建てた者の話など）もパウロ書簡のある部分（例えば、コリントの信徒らを彼が咎めた出来事）についても同じことが言える。また、旧約の知恵文学、とりわけ箴言やコヘレトの言葉は、一貫して価値観について述べている。これらが何世紀にもわたってキリスト者の良心を形成してきたのである。

繰り返しになるが、われわれが「決断」に必要なものは何かを考えるときにも、聖書の果たす役割は無限に広がっている。われわれが自分の興味関心から一步踏み出て、道徳的な視点を持ち合わせるためには、先述したように、イメージーションが必要である。まさにそこが、聖書がわれわれに手を貸してくれる部分である。聖書は、現実的な場面から少しだけ離れた外にあって、別の角度から語りかけてくる。預言者は叫ぶ。「だから主は言われる」と。聖書の言語や聖書の視点にどっぷり浸かってきた人々にとっては、道徳的な視点は比較的容易に受け容れられる。そして聖書は、あらゆる優れた文学と同様に、登場する人々と彼らの決断のリアリズムを通してイメージーションを補給し、結果へと導いてくれるのである。

道徳的な論議は、聖書の目指す一つのわかり

やすい領域である。正義や愛に向けられた聖書的関心は包括的な原理を提供するものであり、ルールを定める道徳法も、多くの実例も、そしてわれわれをふさわしい方向へ導いてくれる背景にある信条ももちろん聖書によって形成されていく。責任的主体のモデルも、美徳や悪徳についてもまた同様である。すなわち人格形成は、聖書に一貫した道徳的関心なのである。

その場合、聖書には何が書かれていて、何を教えているのかということが問題である。そしてまた、このことは聖書を一つの可能性として見ることである。すなわち、聖書は、良心に対して鋭敏であり、想像力を湧き立たせ、信仰・希望・愛へと導いていく。まさに聖書が聖霊のはたらきとしての恵みを基本的に指し示すものなのである。

最後に、聖書の与える影響力の幅広さについて触れておくことにしよう。あらゆる文脈のなかで忘れられている一つのことは、聖書文学はわれわれの信仰と共同体の物語であることである。聖書が歴史的叙述である以上、聖書の倫理的資料は歴史的の文書である。それは、キリスト教の物語の部分であり、われわれキリスト者の物語であり、伝統であり、神の民の共同体の物語である。さらに、美徳や道徳性を高めるために共同体は何をするのか、聖書を中心とする共同体は信仰者の人生にどう関わっていくのか等々。もっとも聖書がわれわれに指し示すのはキリストであり、すべては神の御霊ゆえにということが前提ではあるが。

道徳教育における聖書の役割は、必然であると同時に多岐にわたり、われわれが提起してきたそれぞれの目的にも適合する。それでもまだ聖書につまずく者は少なくない（聖書そのものがそう要求しているのだが）。そして、聖書がわれわれの心の中で確実に起こっている事柄を描出するものである以上、それは道徳心理学的手続きを避けて通ることはできない。倫理学に

おいて聖書を有効に用いるためには、すなわちわれわれがまずその内容について深く知る必要がある。私が提起したいのは、第1章で示した11の目的のうちの読者が関心を持った事柄を通じて、読者自身がそれらを明らかにしていくことである。巻末に付した参考文献リストがそのための、また本書で紹介してきた他の課題に取り組む上でのよき助けとなるだろう。

- 21) このことは、マルコム・レイド (Malcolm Reid) の未刊行論文 "A Sketch of a Christian Ethic of Virtues, Character Development and Moral Decision Making" に負うところが大きい。さらには、オドノヴァン (Oliver O'Donovan) の *Resurrection and Moral Order* (Eerdmans, 1986) 第10章も参照されたい。また、ネルソン (Paul Nelson) の *Narrative and Morality: A Theological Inquiry* (Penn. State Univ. Press, 1987) は、ハーワースが憂慮する個人主義化や美徳の倫理の十分に反論するものである。
- 22) *Nicomachean Ethics* II.1-III.5.
- 23) *A Community of Character* (Univ. of Notre Dame Press, 1981).
- 24) *On the Morals of the Catholic Church, in Basic Writings of St. Augustine*, vol. 1, ed. Whitney J. Oates (New York: Random House, 1948), pp. 319-360.
- 25) ジョージタウン大学創立200周年記念式典において (*America, August 5, 1959*, pp. 54-60所収)
- 26) Paul Ramsey in *The Roots of Ethics*, ed. Daniel Callahan and H. T. Engelhardt, Jr. (Pilgrim Press, 1976), pp. 154-166.
- 27) Lewis B. Smedes, *Choices* (Harper and Row, 1986), chap. 4.

参考文献リスト

1. モラル教育

- Aristotle. *Nicomachean Ethics*. (邦訳・加藤信朗訳『アリストテレス全集13 ニコマコス倫理学』岩波書店、1973年)
- Baum Robert J. *Ethics and Engineering Curricula*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Beck, C. M., B. S. Crittenden, and E. V. Sullivan, eds. *Moral Education*. Paramus, N.J.: Paulist-Newman Press, 1971.
- Callahan, Daniel, and Sissela Bok. *Ethics Teaching in Higher Education*. New York: Plenum Press, 1980.
- Chickering, Arthur. *Education and Identity*. San Francisco: Jossey-Bass, 1969.
- Christians, Clifford G., and Catherine Covert. *Teaching Ethics in Journalism Education*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Clouser, K. Danner. *Teaching Bioethics: Strategies, Problems, and Resources*. Hastings-on Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Dykstra, Craig. *Vision and Character: A Christian Education Alternative to Kohlberg*. Mahweh, N.J.: Paulist Press, 1981.
- Fleishman, Joel L., and Bruce L. Payne. *Ethical Dilemmas and the Education of Policymakers*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Hauerwas, Stanley. *Character and the Christian Life: A Study in Theological Ethics*. San Antonio, Tex.: Trinity University Press, 1975.
- Heath, Douglas H. *Growing Up in College*. San Francisco: Jossey-Bass, 1968.
- Joy, Donald M., ed. *Moral Development Foundations: Judeo-Christian Alternatives to Piaget-Kohlberg*. Nashville: Abingdon Press, 1983.
- Kelly, Michael J. *Legal Ethics and Legal Education*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Kohlberg, Lawrence. *The Philosophy of Moral Development*. New York: Harper and Row, 1981.
- McGrath, Earl. "Careers, Values and General Education." *Liberal Education* 60 (Oct. 1974): 281-303.
- Morrill, Richard. *Teaching Values in College*. San Francisco: Jossey-Bass, 1980.
- Perry, William. *Forms of Intellectual and Ethical Development in the College Years*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1970.
- Powers, Charles W. *Ethics in the Education of Business Managers*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Raths, Louis, Merrill Harmin, and Sidney Simon. *Values and Teaching*. Columbus, Ohio: C. E. Merrill Books, 1966.
- Reamer, Frederic. *The Teaching of Social Work Ethics*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1982.
- Rest, James. *Moral Development: Advances in Research and Theory*. New York: Praeger, 1986.
- Rich, John Martin, and Joseph L. Devitis. *Theories of Moral Development*. Springfield, Ill.: C. C. Thomas, 1985.
- Rosen, Bernard, and Arthur Caplan. *Ethics in the Undergraduate curriculum*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Sherman, Lawrence. *Ethics in Criminal Justice Education*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1981.

- Simon, Sidney, and H. Kirschenbaum, eds. *Readings in Values Clarification*. San Francisco: Winston Press, 1973.
- Stiles, Lindley, and Bruce D. Johnson, eds. *Morality Examined: Guidelines for Teachers*. Princeton, N.J.: Princeton Book Co., 1975.
- The Teaching of Ethics in Higher Education: A Report by the Hastings Center*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Warwick, Donald P. *The Teaching of Ethics in the Social Sciences*. Hastings-on-Hudson, N.Y.: Hastings Center, 1980.
- Wolterstorff, Nicholas. *Educating for Responsible Action*. Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 1980.
2. 聖書と倫理
- Beach, Waldo, and H. Richard Niebuhr, eds. *Christian Ethics: Sources of the Living Tradition*. New York: Ronald Press, 1955.
- Birch, Bruce C., and Larry L. Rasmussen. *Bible and Ethics in the Christian Life*. Minneapolis: Augsburg Publishing, 1976.
- Cook, David E. *The Moral Maze: Way of Exploring Christian Ethics*. London: SPCK, 1983.
- Curran, Charles E., and Richard A. McCormick. *The Use of Scripture in Moral Theology*. Mahwah, N.J.: Paulist Press, 1984.
- Gustafson, James M. *Protestant and Roman Catholic Ethics: Prospects for Rapprochement*. Chicago: University of Chicago Press, 1978.
- Hauerwas, Stanley. *The Peaceable Kingdom: A Primer in Christian Ethics*. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1983. (邦訳・東方敬信訳『平和を可能にする神の国』新教出版社、1992年)
- Higginson, Richard. *Dilemmas: A Christian Approach to Moral Decision Making*. London: Hodder and Stoughton, 1988.
- Kaye, Bruce. *Using the Bible in Ethics*. New York: Grove Books, n.d.
- Mott, Stephen C. *Biblical Ethics and Social Change*. New York: Oxford University Press, 1982.
- . *Jesus and Social Ethics*. New York: Grove Books, 1984.
- O'Donovan, Oliver. *Resurrection and Moral Order: An Outline for Evangelical Ethics*. Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 1986.
- Ogletree, Thomas W. *The Use of the Bible in Christian Ethics: A Constructive Essay*. Philadelphia: Fortress Press, 1983.
- Smedes, Lewis B. *Mere Morality: What God Expects from Ordinary People*. Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 1983.
- . *Choices*. San Francisco: Harper and Row, 1986.
- Spohn, William C. *What Are They Saying about Scripture and Ethics?* Mahwah, N.J.: Paulist Press, 1984.
- Thielicke, Helmut. *Theological Ethics*. Philadelphia: Fortress Press, 1966.
- Verhey, Allen. *The Great Reversal: Ethics and the New Testament*. Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 1984.
- Wright, Christopher J. H. *An Eye for an Eye: The Place of Old Testament Ethics Today*. Downers Grove, Ill.: Inter Varsity Press, 1983.
- Wolterstorff, Nicholas. *Reason within the Bounds of Religion*. Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 1976.